



- 01/ 武漢市外事工作委員會  
処長 金万嬋さん
- 02/ 武漢市友好都市資料館での  
大分市の展示
- 03/ 長江大橋の歩道から  
漢口方面を望む
- 04.05/ 黄鶴楼
- 06/ 武漢駅(高速鉄道)

# 武漢市が初めて 国際友好都市の 関係を結んだ 大分市。 その歴史と 関わりの深さを 振り返る。

水の都、桁違いの大きさ

中国内陸部に位置する武漢市は、大分市の20倍以上の人口(約1108万人)を擁する湖北省最大都市です。150以上の湖があり、中国最大の長江とその最大の支流・漢水が合流する市内は、全面積の4分の1が水域という、まさに水の都です。

武漢天河国際空港に降り立つて、その大きさやスケール感に圧倒されたのも東の間、中心部へと向かう車窓から見える景色は、果てしなく広大な平地に建設中も含めて林立する高層ビル群。道路にあふれる人、車、自転車、電動バイク。街中にあふれる若者の活気。その反面、古きを大切にす精神を表した現役の歴史的建造物や新築のビル群の間の路地で出会う混沌の景色もまた、武漢市の今なのでしよう。

## 3800年、武漢の奥深さ

一度は訪れたい場所の代表格は、長江と対岸のビル群を望む『黄鶴楼』。中国の江南三大名楼の一つで、李白の漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」にも登場する武漢を象徴する建物です。眼下の『武漢長江大橋』は川幅1500mの長江に架かる鉄道と道路用の2層構造。両端には歩道も

整備され、歩いて渡ることも可能です。

3800年続く武漢の歴史に触れるなら『武漢博物館』へ。市の誕生や時代変遷、貴重な出土品・芸術品など、武漢の奥深さを伝える展示物が充実しています。外国人が警察・行政を管理していた名残を伝える『漢口租界』もまた、建築遺産として大切な場所。日本やイギリス、ロシアなど各国の租界時代の姿を残した建物が、姿新しい施設として活用されています。

そして、忘れてはならないのが、中国十大古琴曲『高山流水』の舞台とされる『古琴台』。敷地内の東屋は大分市『武漢の森』の『知音亭』のモデルとなった建物で、『知音亭』の屋根は武漢市から贈られた、るり瓦が用いられています。友好の象徴に出会える場所として、市民の皆さんにぜひ知ってもらいたい、思い出してもらいたい場所です。

## 友好都市、不動の1番

滞在初日に出向いた『武漢市友好都市資料館』は元々ドイツ領事館だった建物で、武漢市と世界各地の友好都市の締結の歴史を紹介しています。実は武漢市が初めて国際友好都市を結んだのが大分市であるため、大分市が一番最初に紹介されています。「大分市と武漢市の友好関係とス

ムーズな連携という実績があるからこそ、他都市との交流や交渉が行えます。両市の関係をさらに深め、市民や企業の交流を今以上に実現することで、いずれは大分市との直行便が就航するのが私の夢です」とは、武漢市と他都市との交流の窓口を担当する『武漢市外事工作委員会』処長※、金万嬋さん。締結40周年を記念する各行事の成功に向けて尽力してくれる金さんは、これまでに関わった大分市スタッフとの交流を今も続け、個人レベルでも良好な関係を続けていると笑顔で語ってくれました。



※処は担当部署の単位。金さんはアジア処の担当処長。